

# M・J・エリックソン『キリスト教神学』第一巻

Millard J. Erickson "Christian Theology" volume 1

Baker Book House 1983

泉 田 昭

この夏、幾冊かの本をじっくりと読むことができた。その一冊が、M・J・エリックソンの『キリスト教神学』第一巻であり、現代の神学状況をよくふまえた、わかりやすい神学書である。エリックソンは、かつてはホイートン大学で教鞭をとっていたが、現在はセントポールにあるベテル神学校で教えている。

第一巻では、神学とその方法論、啓示と靈感、神論がその主な内容となっている。英文ではすべてが美しい表現で纏められているが、その内容を簡単に紹介すると次のようである。

## PART ONE Studing God

1. What is Theology?
2. Theology and Philosophy.
3. The Method of Theology.

4. Theology and Critical Study of the Bible.
5. Contemporizing the Christian Message.
6. Theology and its Language.

## PART TWO Knowing God.

7. God's Universal Revelation.
8. God's Particular Revelation.
9. The Preservation of the Revelation: Inspiration.
10. The Dependability of the God's Word: Inerrancy.
11. The Power of God's Word: Authority.

## PART THREE What God Is Like.

12. The Greatness of God.
13. The Goodness of God.
14. God's Nearness and Distance: Immanence and

## Transcendence.

### 15. God's Three-in-Oneness: The Trinity.

#### PART FOUR What God Does.

### 16. God's Plan.

### 17. God's Originating Work: Creation.

### 18. God's Continuing Work: Providence.

### 19. Evil and God's World: A Special Problem.

### 20. God's Special Agents: Angels.

第一部の第三神学の方法においては、今日の神学状況が説明され、神学をする過程が叙述されている。彼は、神学は科学であると同じように芸術であり、真実で純粹でなければならぬと強調している。聖書のメッセージの健全な理解と統一、そのすぐれた分析と検証、教理的構築と現代的表現、中心的モチーフの展開と調和等に言及し、神学はまさに総合芸術であることを明らかにしている。第四の神学と聖書の批評的研究は、今日の私たちに最も関心のあるところである。まず様式批評学をとりあげ、その背景を説明したあと原理に言及する。イエスの物語や教説はまずそれぞれ独立して伝えられ、やがて文学様式に従って分類され保存され、初代教会の生活の座によって決められていった、というのである。このような様式批評学の原理と方法は、福音書におけるイエスの行動と言葉の背景と関係を明らかにするために大きく貢献したことは高く評価できるが、聖書を単なる歴史的文書として

扱うことによってその本質を見失う危険があると指摘している。様式批評学批判という項目において、彼は初代キリスト者や聖書記者たちが歴史的関心に欠けていたと考える誤りを指摘し、信仰的視点からのみイエスを考えていたように扱う批評学者の偏見を鋭くついている。批評学もまた批判されなければならぬのである。特に「生活の座」という視点から聖書のテキストを説明しようとするとき、その「生活の座」つまり歴史的状況をどのようにとらえるかも十分に慎重に検証されなければならないからである。次に編集批評学の問題であるが、著者がどのような神学的目的と方法によって聖書を叙述編集したかであるが、その目的と方法を説明することは確かに聖書のメッセージを知るために重要である。しかし、また聖書のメッセージを相対化する危険もある。最後に、批評的方法の評価のガイドラインとして、彼は次のことをあげている。第一は反超自然的な前提をそのまま容認できないこと、第二は循環論法つまり生活の座によって福音書の物語を再編集しながら同じ聖書の中の物語によって生活の座を説明するやり方には注意しなければならない。第三は確認されていない推論には慎重であること、第四は独断と主観に気をつけること、第五は信仰と理性を極端に対置する方法を警戒すること、である。批評学という学問は、近代の合理主義の前提と方法を安易にうけいれることによって、聖書の本質を見失っているだけではなく、学問の方法論としても独断と偏見に陥つてしまいがちからである。これは、人間の営

むすすべての学問の宿命であり限界であるが、特に聖書とか神という絶対的領域にかかわる問題を扱うときには充分に心しなければならぬことである。

第二部では、一般啓示と特別啓示を扱ったあと、靈感の問題に言及し、続いて今日大きな問題となっている無誤性について論じている。第十神のことばの信頼性——無誤性——がそれである。まず無誤性の多様な概念を説明し、絶対無誤説、充全無誤説、限定無誤説を紹介する。絶対無誤説とは、聖書は歴史と科学の問題にも論及し、それらにおいても真理であるというのである。<sup>①</sup>充全無誤説とは、聖書は歴史や科学について書かれたのではないが、それらに関する言及も誤りが無いというのである。<sup>②</sup>限定無誤説とは、聖書は救いに係わる教理についてのみ、無謬であり無誤であるというのである。つまり、聖書が与えられた目的に関しては、完全に真理であり、誤りがないというのである。<sup>③</sup>その目的というのは、キリストとの人格的な交わりに導くことであって、すべての真理に導くことではないというのである。

無誤性の問題を論ずること自体あまり重要ではないという根づよい論議に対し、聖書の信頼性は「神の子たちにとつては靈的本能である」というヘルムート・ティエリツケの言葉を引用し、神学的に歴史的にそして認識論的にきわめて重要であると強調している。神学的には聖書の權威に係わることであり、神は全知であるゆえにすべての誤りを知り、全能であるゆえにすべての誤りから守られるのである。無誤である

ことは充全靈感の必然的な結果である。歴史的重要性であるが、アウグスティヌスからカルヴァンまでどれほど聖書の權威を重要視してきたかを説き、もし私たちがこの教えをいまいに扱うならば聖書に対する信頼が大きく揺ぐであろうと警告している。認識論的重要性であるが、聖書によって神の本質とか贖罪等について認識することができるのであるが、それらの認識は私たちの感覚的経験の領域を超えたものである。私たちはその真理または妥当性を経験的に検証することはできない。もし聖書には誤りがあるかも知れないということとを人間の知識や経験によって立証しなければならぬとすれば、どのような前提に立つてそれをするのであろうか。

エリックソンは、無誤性について、さらに彼の論議を進める。第一は、無誤性は聖書で単に伝えられていることではなく、主張され確認されていることに係わる。第二は、聖書の真理はそれが表現されている文化的状況で語られた意味で判断する。第三は聖書の主張はそれが書かれた目的との関係において判断される。第四は歴史的出来事や科学的事柄のレポートは専門的用語というよりむしろ現象的である。第五に聖書の本文の説明における困難な箇所は誤りを示していると早まって判断してはならない。要するに、エリックソンが言いたいことは、聖書をその本来の意味において正しく理解し、それにもとづいて無誤性を論じなければならないということであろう。また、一つ用の語を使うとき、それが正しく全体を表現するように配慮しなければならないということである。

第三、第四部では、神の自身への働きに論及している。

〈注〉

① Harold Lindsell, The Battle for the Bible (Grand Rapids; Zondervan, 1976), pp. 165-66.

② Roger Nicole, "The Nature of Inerrancy" in Inerrancy

and Common Sense, ed. Roger Nicole and J. Ramsey Michaels (Grand Rapids: Baker, 1980), pp. 71-95.

③ Daniel P Fuller, "Benjamin B. Warfield's View of Faith and History," Bulletin of the Evangelical Theological Society 11 (1968) 75-83.

〔美談神学・講座〕